黄斑変性への鍼施術が、視力に及ぼす影響について

千秋針灸院　春日井　真理、菊池　真樹子

【緒言】 長寿社会の到来と共に良好な視機能の維持は課題である。重篤な視機能障害の原因の一つである加齢黄斑変性をはじめ各種黄斑疾患などに対し、視機能の維持、回復を目的として、中医学的アプローチにより鍼施術を行い、視力に有意な変化がみられたため報告する。

【対象】 眼科にて加齢黄斑変性をはじめ、若年者の脈絡膜新生血管、萎縮型黄斑変性などの診断に至った81名107眼に対し、2002年～2015年にかけて、視力や変視の程度により週2回から月1回の施術を行った。施術開始から3ヶ月時点(平均施術回数19.5回±5.9回)の視力変化を評価し、24ヶ月間施術を継続した43名56眼についても同様の評価を行った。

【方法】 ステンレス鍼(山正社製)を用いて、先に伏臥位で頚部の天柱穴・風池穴、背部の肩中穴・肝兪穴・脾兪穴・腎兪穴に刺鍼し15分置鍼した。次に仰臥位で下腿部の太衝穴・光明穴・三陰交穴、前腕の合谷穴、顔面部には上睛明穴・健明穴・球後穴に刺鍼し15分置鍼した。中医学的アプローチとしては、黄斑変性を主に脾不統血として捉え、個々の患者の体質により、肝腎両虚、脾胃虚弱などを考慮し、置鍼時間や刺鍼部位の調整を行った。

【評価法】 液晶視力表(NIDEK社製)の字一つ指標により5m遠見視力を、裸眼もしくは矯正された眼鏡等で測定した。視力の評価は、初回施術時で少数視力1.0以上の14眼を除いて行い、対数変化0.2未満を不変、±0.2以上の変化をそれぞれ有効・悪化、0.3以上の改善は著効とした。

【結果】 鍼施術開始から3ヶ月経過した93眼の著効例は46.2%、有効以上は61.3%、不変37.6%、悪化は1.1%となった。24ヶ月経過した47眼の著効例は70.2%、有効以上は80.9%、不変17.0%、悪化は2.1%であった。

黄斑変性の発症年齢に着目し、50歳未満群(48眼)と50歳以上群(45眼)に分類した。3ヶ月経過時で50歳未満群では著効例が37.5%・有効以上が52.1%に対し、50歳以上群では著効例が55.6%、有効以上は~~73.3%~~ 71.1%となり、有意な差がみられた。

抗VEGF硝子体内注射の影響を考え、鍼施術開始前3ヶ月もしくは施術開始後に注射が行われた注射群(25眼)と、注射が3ヶ月以内に行われていない非注射群(68眼)の視力変化を比較検討した。3ヶ月経過時で注射群の著効例は48.0%、有効以上は56.0%に対し、非注射群の著効例は45.6%、有効以上は63.2%であり、有意な差はみられなかった。

【考察】 鍼施術は加齢黄斑変性などの視力に影響を及ぼし、視機能維持に役立つ可能性が示された。若年者への効果は中高年より低い結果であったが、強度近視眼の割合が関与することが推察され、更なる検討を進める必要がある　　(一部訂正のため編集済)